

1. 新センター長挨拶

本年度より、生涯学習教育研究センターは教育・学生支援機構に入り、新たな船出をしました。この組織改編にともない、いずれ専任教員(現担当教員)がセンター長を務めるという方針が示されたことを受け、センター長として微力を尽くすことになりました。

私事ですが、本学に着任して5年が経過しました。その間、医学部との統合、国立大学法人化、組織改編と大きな変化を経験しました。その中で本センターが埋没しないよう、変革を目指してさまざまな取り組みを行ってきました。受講料収入に応じた研究費還元型の公開講座を全国に先駆けて実施したり、ニュースレターを発行することでより多くの学内教職員にセンターへの理解を得ようとしたり、現代GPや大学博物館への積極的な協力を行ったり、学内貢献をひとつの柱としました。本来期待される地域貢献部門では香川県教育委員会と2つの協定を結び、県内の指導者養成のまとめの部分を大学として引き受けたり、担当教員が生涯学習政策アドバイザーとして週4時間生涯学習・文化財課へ出向し、教育委員会のみならず知事部局や市町あるいは団体からの相談を受けたりしています。その他にも各種委員会や研修等で数多くの地域貢献の実績を上げてきました。

今後もアグレッシブな生涯学習教育研究センターの姿勢を失わず、邁進していく所存です。公開講座だけではなく、さまざまな領域でみなさまと一緒にできれば幸いです。今後も変わらずご支援賜りますようお願い申し上げます。

生涯学習教育研究センター長 清國 祐二



2. 参加型学習への誘い～センター担当教員の研究・実践紹介(2)～

今回は、グループワークにおけるラベルワークを中心に実践紹介をします。なぜグループワークと断ったかということ、ラベルワークそのものは必ずしも集団で行うことを前提としているわけではなく、個人のデータ整理や分類にも使えるからです。

ラベルワークのオーソドックスな展開は、あるテーマに関する個人のアイデアをできるだけたくさん集め、それをグルーピングし、分類されたグループに適切なネーミングをしながら、それぞれのグループの関連を明らかにすることで、課題の構造的把握を目指すという形です。展開自体は単純なのですが、ラベルワークに不慣れな人にとってはグルーピングの妥当性やネーミングの適切性などの判断が困難で、大きな戸惑いを感じたり、行き詰まったりして、集中力が途切れてしまいます。それを克服するための方法が「イメージ・ラベルワーク」なのです。(前回のニュースレターをご参照下さい。)

私は、このイメージ・ラベルワークを参加型学習に不慣れな一般成人や学生向けに行っています。主要な理由を以下紹介します。

- ①論理的思考の必要な構造的把握を「イメージ図」に落とす作業を通して、ストーリーとして全体像の把握が容易となる。
- ②ラベルワークはグルーピングとネーミングに時間を要するが、この方法だとイメージ図の決定からネーミング→グルーピングと遡って考えられる。



- ③できあがりイメージ図なので周囲のグループの進展状況が一目瞭然であり、自分たちのペースもつくりやすい。
- ④学習者の特性(発想の面白い人、論理的に考えられる人、言葉を沢山知っている人、絵の上手な人、リーダーシップのとれる人など)が自然と活かされる。
- ⑤共同作業によるイメージ図の完成で達成感が得られやすい。
- ⑥イメージ図のもつメッセージ性が強いため、グループ発表が短時間でわかりやすく、聞く側を飽きさせない。

以上のように、ここで得られた学習参加への満足感が次の学習に誘うと考えられるので、学習者の特性に応じて使用しています。しかし、どうしてもイメージ図に注意が向かってしまい、課題の背後にある状況に深く触れたり、課題の構造をじっくり考えることには不向きであることも事実です。ラベルワークはあくまでも学習を支援する手法ですので、学習目的に応じた使用を心がけなければならないことはいうまでもありません。

次回は、ランキングについてご紹介します。(文責:清國)

3. 新刊紹介

佐々木正治編『生涯学習社会の構築』福村出版、2007年4月

* * * * *

本書は、生涯学習社会の構築に向けて必要とされる諸課題を構造的に把握するために編集されています。現代社会を生きる不可避免的要素としての学習への認識は高まりつつあるものの、それが必ずしも社会システムとして構築されているわけではありません。包括的な理念である生涯学習を社会システムという文脈でとらえて、これまでの課題を整理しつつ、近年の社会変化を視野に入れ、今後の方向性を示しています。平成の大合併や教育基本法の改正を契機に各地で改めて生涯学習の振興が議論されています。そのような状況を考えると、とても時宜を得た良書といえるでしょう。

* * * * *

<担当執筆章>第5章「生涯学習の推進と計画」(清國祐二)

キーワード:社会計画(総合振興計画) 教育計画・生涯学習推進計画 社会教育計画の原理
学習者の自由・自発性 社会教育行財政 指定管理者制度 民間活力の導入



4. 平成19年度公開講座の追加募集、締切迫る！

一昨年度より公開講座の募集を12月と6月の年2回実施しております。

メールにてすでにご連絡してありますとおり、6月4日より今年度後期分の公開講座追加募集が始まりました。締切は7月2日(月)です。計画の詳細は本センター担当教員との協議の中で詰めていただければ結構ですので、頭の片隅に構想がありましたら、是非ともお申し込み下さるようお願いいたします。

📍 申込先: センター事務室 内線:1273 メール:syogse@ao.kagawa-u.ac.jp

センター雑感

今夏は4年に1度の四国地区社会教育主事講習が開催されます。現職の自治体職員や教員の方々が当センターにて1ヶ月間研修を受けます。活気ある香川大学の姿が彼らの目にうつることを期待しつつ、準備を進めています。(山本)

1. 四国地区社会教育主事講習が開催されました

社会教育主事とは、社会教育法第9条の2によって都道府県及び市町村の教育委員会の事務局に必置が義務づけられている職員です。本講習は主事資格を取得するために、全国各地の大学や国立教育政策研究所で毎年随時開催されています。四国地区に関しては4県持ち回りで実施することとなっており、香川大学は4年に1度担当校となります。(ただし昨年度まで、今年度から公募制となり、次年度以降は未定です。)

さて、平成19年度は香川大学が担当校となり、7月23日から8月23日まで、当センターにて開催されました。講習実施にあたり、昨年12月から準備をはじめ、学内外の合計32名の先生方にご協力いただきました。そして四国四県から現職教員や教育委員会事務局職員、首長部局職員が、資格取得のために真夏の1ヶ月間、幸町キャンパスに通われました。



本講習は、講義と演習からなります。講義は生涯学習関連法制(教育基本法、社会教育法、図書館法、博物館法、スポーツ振興法、など)や生涯学習の歴史などベーシックとなる知識から、まちづくりや男女共同参画、家庭教育などの実践的知識まで、幅広く学びました。

演習には、個人演習、班別演習、そして現地視察が含まれます。個人演習では本講習で学んだ視点から、改めて自らの業務や、それぞれの自治体の現状について、批判的検討を加えた意欲的なレポートが提出されました。班別演習では、班毎にテーマを決め、あるグループは子育て支援を行っているNPO法人等を訪問したり、また別のグループは市町村合併後の生涯学習行政をテーマに現地取材を行い、その成果については最終日前日に班別プレゼンテーションを行いました。講習生全員による現地視察では直島の産廃中間処理施設や地中美術館等を訪問しました。

講習は最も長い日で朝9時から夕方6時まで、1時間半単位で1日5コマ、レポート(宿題)提出も課されていましたので、夜ものんびり過ごすというわけにもいかず、大学生よりもハードだったかもしれません。香川県内からの講習生は自宅から通っていましたが、徳島・愛媛・高知からの講習生は平日は大学の近くのホテル、ウィークリーマンションなどに泊まり、週末自宅に帰るといった“カンヅメ”生活でした。中には、休憩時間になると1ヶ月間不在にする職場に携帯電話で指示を出したり、夕方6時の講習終了後から職場に顔を出すという“強者”もありました。7月末には参議院選挙がありましたので、選挙の事務担当となっていた講習生は、連日連夜のハードワークにさすがにグッタリとした様子でした。そのような状況にあって、1ヶ月間の長丁場をともに過ごした「仲間」として、講習終了時には達成感とともに連帯感も感じられました。

個人的なことになりますが、私自身は他大学で実施する社会教育主事講習に講師として招かれた経験はあったもの



の、「ホスト校」の一員として講習生のお世話をしたのは今回がはじめての経験でした。すでに現場を経験している現職の方々と相手に講義・演習を行うためには、生半可な知識では太刀打ちできません。自らの知識を見直すきっかけになると同時に、講習生から多くのことを学ぶこともできました。大変充実した講習だったのではないかと感じている次第です。(文責:山本珠美)

2. 参加型学習への誘い～センター担当教員の研究・実践紹介(3)～

今回は、ランキング(順位付け)について紹介します。ランキングとは、特定のテーマに関連する10個程度の課題や政策、価値観等を項目として取り上げ、参加者がグループで話し合い、納得のいく順位づけを行うものです。参加者相互の合意形成を図ることを目的とすることから、コンセンサス法とも呼ばれています。古い話になりますが、かつては行政職員研修の中で「あなたが本市の市長であれば、どの政策から実施していきますか?」といったランキングをよく目にしたものです。

表:まちづくりの優先順位を決めるワーク例

	国東	国見	安岐	武蔵	姫島	グループ
児童(小学生以下)の医療費を無料にする	2	3	4	1	5	
土地提供による工場誘致を行う	3	4	2	2	4	
渋滞緩和のためのバイパス整備を行う	5	5	1	5	3	
子どもの減少に伴い義務教育学校の統廃合を行う	4	2	5	4	2	
議員特権の見直しを行う	1	1	3	3	1	

上表をご覧いただくとわかるように、ランキングの特徴は一目瞭然さにあります。誰がどのようなランキングを行ったかが、ワークシート上に整然と示されるのです。数字の散らばり具合から全体像もつかめますし、より重要なものが少数意見に注目が集まることなのです。合意形成のプロセスは多数意見を集めることではなく、少数意見にこそ着目し、その意見の背景を理解しつつ議論することが大切なはずです。さまざまな考え方を理解した上で納得して意思決定しないと現場での混乱を来します。

次に、議論というよりは話し合いの際に、本来の趣旨から逸脱することがまま見受けられます。ランキングの場合、みかけの目標が項目の順位付けを行うことにあるため、議論が脱線して迷走するリスクが低いことがあげられます。限られた時間の中で、議論を効果的に行う際に有効な手法であるといえます。「みかけ」と断ったのは、よっぽど切羽詰まった意思決定の場面でない限り、参加型学習は「学習」にウエイトが置かれ、順位付け自体よりも意思決定のプロセスを体験し、理解することの方が重要だからです。

前回紹介したラベルワークと今回紹介したランキングは学習促進手法としてシンプルではありますが、非常にベーシックなものだと考えます。グループワークや討議法については、ブレーン・ストーミング、バズセッション、ロールプレイング、ディベート、パネルディスカッション、フィールドワーク等々さまざまなものがありますが、これらを手法としてのみ理解していると、不十分なのです。参加型学習をより効果的に使うためには、教育なり学習の本質を考えると同時に、個人と集団とで生起しうる学習の相違に目を向けるべきではないかと考えます。

残念ながら紙幅の関係で、上述の内容については次回のニュースレターに譲ることとします。最後に余談ではありますが、今年の1年生はワークショップ慣れしているとみなさんは思われませんか? ゆとり学習と総合学習世代のひとつの成果ではないかと感じています。(文責:清國祐二)

センター雑感

当センターが大学教育開放センターとして設置されたのは1978年です。発足当初の専任教員は1名、現在は2名という弱小センターですが、学内外の方々に支えられて、来年には30周年を迎えることとなります。これから記念イベントに向けての準備をはじめるところです。今後とも当センターにお力添えを頂きたいと思っております。(山本)

1. 公開シンポジウム開催！ 「大学の資源を地域の教育に活かす～大学博物館の目指すもの～」

すでにみなさまご存じかと思いますが、本年4月に香川大学博物館が開設されました。現在、来年度の開館を目指して、教育学部1号館1階の該当スペースの改装工事が進められています。

この度、当センターでは、大学博物館の第2回学外特別展「かがわの里山～その自然、風土、歴史 香川大学による研究の軌跡」(2008年1月22日～27日、ヨンデンプラザ高松1Fギャラリー)とあわせて、標記シンポジウムを開催することとなりました。学内教職員のみなさまの積極的な参加をお待ちしております。

なお、本シンポジウムは公開で行われるものですが、大学開発教育センターより全学のFD研修会の一環としても認められております。参加ご希望の方は、お手数ですが事前にセンター事務室までご連絡下さい。(内線1273、syogse@ao.kagawa-u.ac.jp)

2008年1月24日(木) 13:30～16:00 高松市生涯学習センターまなびCAN多目的ホール

第Ⅰ部: 基調講演(13:30～14:30)

「資料からはじまる、知的探検の楽しみ」

(林 良博・東京大学総合研究博物館長)

第Ⅱ部: シンポジウム(14:30～16:00)

「地域博物館の実態と大学博物館への期待」

(田井静明・香川県歴史博物館主任専門職員)

「香川大学博物館の現状と課題」(丹羽佑一・大学博物館長)

「生涯学習の拠点としての香川大学」(清國祐二・生涯学習教育研究センター長)



総合司会: 山本珠美・生涯学習教育研究センター准教授

2. 平成20年度公開講座の募集を開始しています

すでにメール等でお伝えしております通り、12月3日より来年度の公開講座の募集が始まっております。開講ご希望の方は、平成20年1月18日(金)までに、配布いたしました計画書をセンター事務室までご提出下さい。

なお、この度「平成20年度公開講座実施要領」に一部変更がありました。現在、細部について調整中ですので、まとめ次第、みなさまにメール等にてお送りいたします。ご確認の後、奮ってお申し込み下さい。



申込先: センター事務室

内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp



問合せ先: センター長 清國祐二

内線1272 kiyokuni@cc.kagawa-u.ac.jp

3.『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告第13号』投稿募集

当センターでは毎年度『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』を発行しております。生涯学習を研究する本学教員、センターが主催する講座等を担当した本学教員、また、センターが主催する講座等を担当した学外講師で編集委員会が認めた者であれば、どなたでも投稿することができます。

すでにメールでお伝えしております通り、投稿ご希望の方は、所属、氏名、論文仮タイトルを平成19年12月25日(火)までにセンター事務局または下記担当教員までご連絡下さい。

原稿締切は平成20年2月1日(金)です。多くの方のご投稿をお待ちしております。

(なお、投稿要領の改定により、原稿の電子化を行い、センターHPに順次公開されます。)

📍 申込先: センター事務局 内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp
📍 問合せ先: センター専任教員 山本珠美 内線1271 yamamoto@cc.kagawa-u.ac.jp

<2006年度第12号掲載論文>

生涯学習の推進を図るための参加型学習の方法論(2)	清國祐二
長期移動型キャンプの教育効果に関する一考察～学生リーダーへの事前事後調査の比較から～	清國祐二
市民参加型舞台芸術に関する序論的考察	山本珠美

4. 参加型学習への誘い～センター担当教員の研究・実践紹介(4)～

過去のニューズレターで参加型学習の代表的な手法となる「ラベルワーク」と「ランキング」を紹介し、その特徴を述べました。今回は、それらを通して学習者に気づいてもらいたい学習のダイナミズムについて簡潔に説明します。

これまで取り上げたふたつの手法には、教育・学習の基本要素である「自己教育・学習」と「相互教育・学習」の両側面が意図的に位置づけられています。とはいえ、学習の基本は個人学習になります。まずは自らに学ぶ力が備わっていないと学習は発展しません。一方、個人学習の促進や活性化にはさまざまな経験や価値観をぶつけ合う相互学習が有効です。両者がうまく絡み合ってスパイラル状に高まっていけば、人間の弛まぬ成長に必要な学習能力の獲得もできるのだらうと考えます。

その意味で、参加型学習といえども、個人学習(自分の頭を理性的に整理する時間)と相互学習(他者との知的交流によって従来の思考を再構成する時間)の効果的な組み合わせに配慮する必要があります。加えて、学習者が相互に振り返りを行うことも重要です。必ずしも参加した学習者が同じレベルで参加型学習の効果や意義を認識できているわけではありません。自分の心の動きや変容のプロセスを自覚化させる作業(振り返り)を組み込むことによって、さらに相互に学び合うことができます。

これら一連のプロセスは、ある程度まとまった学習時間を必要とします。大学の授業のような1コマ90分という制約の中では困難な部分はありますが、よりよい学習者を育てるために、来年度は専門の授業の中で、学生向けの参加型学習の開発に取り組もうと考えています。(文責:清國祐二)



センター雑感

最近、縁あって元ラグビー日本代表でもあり、タレントでもある大八木淳史さんと懇意になりました。私たちの共通項は青少年育成で、交流が始まってから当センターにもすでに2回お越し下さいました。トップアスリートのセカンドキャリアや生き様に学ぶことも多く、何とか香川大学にお力添えをいただけるよう画策中です。楽しめる仕事ができることに感謝です。(清國)

バックナンバーは下記のWebサイトに掲載されています。是非ご覧下さい。

Tel. 087-832-1273 Fax. 087-832-1275 URL. <http://www.kagawa-u.ac.jp/lifelong/> Email. syogse@ao.kagawa-u.ac.jp

1. 公開シンポジウムが開催されました 「大学の資源を地域の教育に活かす～大学博物館の目指すもの～」

2008年1月24日(木)、高松市生涯学習センターまなびCAN多目的ホールにて、公開シンポジウム「大学の資源を地域の教育に活かす～大学博物館の目指すもの～」(主催:生涯学習教育研究センター、共催:大学博物館)が開催され、県内外から約90名が参加しました。

2008年4月には、教育学部1号館1階に香川大学博物館がオープンしますが、本シンポジウムは開館に先立ち、大学博物館のあり方について検討することを目的として開催しました。

シンポジウム当日は、まず林良博・東京大学総合研究博物館長の基調講演「資料からはじまる、知的探検の楽しみ」が行われ、続いて丹羽佑一・大学博物館長から「香川大学博物館の現状と課題」、田井静明・香川県歴史博物館主任専門職員から「地域博物館の実態と大学博物館への期待」、そして清國祐二・生涯学習教育研究センター長から「生涯学習の拠点としての香川大学」について発表がありました。その後、林館長と三者、および会場を交えてディスカッションが行われました。



【林良博館長の基調講演の様子】



【左：後半シンポジウムの様子、右：熱心に耳を傾ける参加者】

大学が収集・保存している資料はもちろんのこと、香川県内の貴重な資料が散逸してしまうことのないよう、大学博物館が果たすべき役割は数多くあること、そして地域社会からの期待も大きいことが、本シンポジウムによって改めて認識させられました。

2. 参加型学習への誘い～センター担当教員の研究・実践紹介(5)～

①参加型学習の効果とは何か

参加型学習は、講義等の一方向の学習スタイルに比べて学習者の満足度が高いと一般的に考えられていますが、それはなぜでしょうか。まずは効果とは何かについて、参加型学習の特性から考えてみたいと思います。

まず、典型的な参加型学習の展開を思い浮かべます。大きく3つの構成、個人ワーク、グループワーク、振り返り・共有化ワーク、で成り立っています。個人ワークは、学習課題について自分自身の過去の経験や知識、感性と向き合ってまとめる作業になり、グループワークの中で「埋没しない」自分自身をつくる作業でもあります。(実はとても大事な作業です。)グループワークは、基本的には個人ワークの成果を持ち寄って討議したり、ともに創りあげる形式をとります。グループの雰囲気は支持的かつ受容的となるような風土づくりが前提となりますが、各々の意見はメンバーから尊重され、自由な発言がうながされます。加えて、さまざまな意見や価値に触れることによって、自分自身の思考や行動の特性が相対的に明らかとなり、新しい発見につながります。グループ内ではメンバーの関係が徐々に形成され、自然発生的に役割ができてきます。振り返り・共有化ワークは、グループワークの振り返りの時間となりますが、そこでは何を学習したかというより、グループワークを通して自分自身の何がどう変容したのかを確認できるという効果

的で、学習を通して人間的な成長を遂げる実感を味わう時間となれば次につながります。

次に、参加型学習は「課題解決を目指す学習」に適していることと、「メタ学習(学習の方法を習得する学習)」の要素をもっているという特性があります。生活者である学習者にとって課題解決は切実な問題であり、実践的で役に立つ方法を身につけたいという意識が強いのです。参加型学習を通して課題解決への道筋がたったと実感できたら、その学習経験は別の課題に直面したときに、活用できる方法論として生きてきます。

さらに、参加型学習を通して学習プロセスとその成果に満足感が得られたら、結果的に学習者間に良好な人間関係ができていくという特性をもっています。その関係が生活場面での課題解決を進める原動力となるかも知れませんが、人的ネットワークが予想もしなかった方向へと展開するかも知れません。このように参加型学習とは、単なる学習活動にとどまらず、関係づくりに貢献し、多くの副産物をもたらす可能性が認められるのです。 文責:清國祐二 (②以降は、次号に続く。)

3.『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告第13号』ができました

当センターでは毎年度『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』を発行しております。生涯学習を研究する本学教員、センターが主催する講座等を担当した本学教員、また、センターが主催する講座等を担当した学外講師で編集委員会が認めた者であれば、どなたでも投稿することができます。

今年度も担当教員に加え、センター外のお二方よりご投稿頂きました。次年度もぜひ積極的なご投稿をお願いします。

<第13号掲載論文>

- | | |
|-----------------------------------|--------------------|
| ヤーコブ・ブルクハルトの公開講義 | 中谷博幸(教育学部) |
| 大正時代のナショナリスト上杉慎吉について | ノイマン、フロリアン(大教センター) |
| 高度情報社会における子育て支援の新しい試みとその検証(3) | |
| ～携帯子育て掲示板の運用指針についての検討～ | 清國祐二(生涯学習センター) |
| 香川大学教育学部生によるラジオ番組制作 | |
| ～文部科学省現代GP「実践的総合キャリア教育の推進」の取組として～ | 山本珠美(生涯学習センター) |

4. 新刊紹介

香川正弘・鈴木眞理・佐々木英和編『よくわかる生涯学習』
ミネルヴァ書房、2008年3月刊行

* * * * *

ミネルヴァ書房の“やわらかアカデミズム・<わかる>シリーズ”中の一冊。生涯学習という言葉が登場して四半世紀以上経つにも関わらず、その領域があまりに膨大であるためか、人によって使い方はまちまちというのが現状です。

本書は大学の教科書として執筆されたものですが、生涯学習の理念・思想、生涯にわたる人間形成、学習振興策、等々、論点が幅広く整理されています。

* * * * *

<担当執筆章> 第IX章「施設に基づいた生涯学習活動」より図書館、博物館の項
第XI章「諸外国の生涯学習」よりイギリス、アメリカの項 (以上、山本珠美)



センター雑感

先日、教育学部で担当している授業の一環で、FM高松のスタジオにて番組収録を行いました。学生と共にラジオ番組を一から企画し実際にオンエアしたのですが、学生のみならず教員の私にとっても大変貴重な経験となりました。この経験をセンター業務にも活かすべく、ただ今ネット配信を考案中です。乞うご期待！(山本)

バックナンバーは下記のWebサイトに掲載されています。是非ご覧下さい。

Tel. 087-832-1273 Fax. 087-832-1275 URL. <http://www.kagawa-u.ac.jp/lifelong/> Email. syogse@ao.kagawa-u.ac.jp